

第10回経済学史学会研究奨励賞受賞作講評

若森みどり『カール・ポランニー——市場社会・民主主義・人間の自由』

NTT出版, 2011年

カール・ポランニー(1886-1964)の『大転換』(1944)は、自己調整的市場の拡大と社会の自己防衛の二重運動によって19世紀および20世紀前半のヨーロッパを捉えた著作として広く知られている。しかしながら、ポランニーの生涯にわたる思想の形成と展開の全体を解明し、その中に『大転換』を位置づけるという作業は、従来十分になされてきたとはいえない。その結果、『大転換』以後、未開社会の分析に関心を移していった経済人類学者としてのイメージが定着することになった。本書は、こうしたイメージからポランニーを救い、経済学者として、あるいは社会哲学者として、現代の産業社会に批判的な目を向け続けたポランニーの思想の全体像を経済思想史の方法を用いて描く力作である。

著者によれば、ポランニーの社会哲学の神髄は、「意図せざる社会的諸帰結がもたらす害悪を縮減する課題」に対して、その責任から逃避するのではなく、責任を引き受けていくところに「人間の自由」があるとしたことである。市場システムは、こうした意味での自由を保障するものではなく、むしろ破壊する傾向をもつ。他方、社会主義も社会がもつ強制や暴力の不可避性を無視すれば自由を侵害するかもしれない。さらに市場社会と民主主義、社会主義と民主主義も複雑で多様な関係をもちうる。これらの課題に関して、ポランニーは、初期にはキリスト教、ギルド社会主義、マルクス主義、オーストリー学派などの思想から、そして第2次大戦後はウェーバーやガルブレイス、アリストテ

レス、ルソーなどの思想から影響を受けつつ、独自の思想を形成し、展開させていった。『大転換』は、自由を基軸とした思想展開の一局面として位置づけられる(本書の内容については、本誌54巻2号、102-03頁においても紹介されているので参照されたい)。

自由の概念を中心にポランニーの思想の全体像を描くという本書の目的は達成されているといえる。また、著者は、公刊文献だけでなく、カナダのポランニー政治経済研究所に所蔵されている膨大な草稿を利用しながら、さらに同研究所が主催するコンファレンスなどに参加しながら、長い年月をかけて本書を完成させており、本書は正当な手順を踏んだ本格的なポランニー研究書として高く評価できる。ただ、思想の全体像を描くことによって『大転換』の持つ思想的・歴史的意義が見えにくくなったことは否めない。また、他の経済学者や哲学者との関係ももっと掘り下げる余地が残されているように思われる。さらに、海外でも進んでいる本格的なポランニー研究(たとえば2010年に出版されたG. Daleの*Karl Polanyi*)と比較したときに、本書がもつ独創性がどこにあるかをもっと明確に示すことができればよかったと思われる。これらの課題を踏まえた上で、本書の内容を英語で発信し、国際的なポランニー研究の推進に貢献することが望まれる。著者の今後の研究活動に期待したい。

2013年3月31日

経済学史学会
学会賞審査委員会